

張仲景の鍼灸學說



張仲景像
(河南省南陽市仲景祠の像)

張仲景、名は機き（二五〇年頃〜二一九年頃）、南陽涅陽（今の河南省南陽鄧県）の人。後漢末の著名な医学者である。彼は『内経』など古典の医籍を広く研究し、一般の人々の治療経験を広く集め、自分の臨床経験とをあわせて、『傷寒雜病論』十六巻を撰した。彼は傷寒の六經弁証と雜病の八綱弁証原則を提唱し、中医の弁証論治理論を發展させた。また鍼灸を用いて傷寒雜病を治療する具体的な方法を提起して、

後世に多大な影響を与えた。彼の著作は晋の王叔和の編集、宋の高保衡、孫奇、林億らの校正を経て現在の『傷寒論』『金匱要略』となっている。

張仲景は鍼、灸、薬いずれをも重んじた医者である。『傷寒論』原序で言及している秦越人（扁鵲）が號で行った診断は、鍼、灸、薬の療法を併用した先例であり、彼がいう「宿より方術を尚ぶ」の「方術」とはつまり「導引、吐納、鍼灸、膏摩」を指している。彼の著作中で直接鍼灸と関係がある条文は六十九条に達

し、彼の鍼灸学説とその考え方が反映されている。条文の中で用いられる穴位は風池、風府、期門、巨闕、大椎、肺俞、肝俞、勞宮、関元など九つ。後世の医家は張仲景の論述にもとづいて、さらに足三里、太谿、隔関、氣海、中極、中脘、太衝、百会、幽門、交信、頤会、廉泉、大杼、缺盆、氣衝、上下廉、雲門、委中などの穴位を補充している。

彼の鍼灸学説は『内経』の學術思想を承け、発展してなったものである。

陽証には鍼、陰証には灸（陽証宜鍼、陰証宜灸）

張仲景の鍼灸学説において陽証宜鍼、陰証宜灸は重要な考え方の一つである。鍼灸と直接関係のある六十九の条文の中で、『傷寒論』を例にとると、鍼灸を用いた正しい治療は全部で十八條。その中で三陽脈の篇に属するのは十一條で刺鍼法がそのうち十條を占め、灸は桂枝加桂湯の一條のみである。この條は三陽篇の灸法に属するが、鍼は寒邪に対して用いられていて、寒であれば温熱の法を用いるのは、陽証宜鍼、陰証宜灸学説とはけつして矛盾しない。三陰脈の篇に属するものは七條あり、その中で灸法が六條を占め、刺鍼法は一條、つまり「少陰病、下利、便膿血者、可刺」のみである。これは少陰病に属するが、邪が血中に入り込んでいるため実熱となつているのである。したがって実であれば瀉すという方法も陽証宜鍼、陰証宜灸とは矛盾しない。誤治は全部で二十一條あり、その中で三陽脈の篇に属するものは十七條ある。誤治の原因はいずれも熱症に灸を用いたものと関係する。三陰脈の篇に属するものは一條で、これは陰証に灸を用いたものだが、陰虚であるため「少陰病、咳をして下利、譫言をいうのは、火氣に攻められたからである。必ず小便が難しいのは、少陰汗を強く責めすぎたからである」とあり、変証である。他篇の三條はいずれも傷寒が熱に変化して内部に伝わる症候で、誤つて火熱治療を用いて壞証になったものである。

以上から張仲景は陽証には刺鍼を、陰証には灸法の治療を考えていたことがわかる。普通には現れない変証、壞証だが、陽証に灸法を用いると変証、壞証になりやすい。陰証に鍼を用いるのは特別な状況においてである。

陽が盛んで陰虚であれば、火灸を用いてはならない

ここでいう火とは艾灸、熏熨、温鍼、燒鍼などのことである。張仲景は陽実証は火で治療してはならないと考えた。たとえば『傷寒論』の百十八條に「脈が浮で、熱がひどいのに、誤つて灸をした。これは実証であるのに、実を虚として治療したため（火邪が上り越えて、熱が陽絡を傷つてしまい、氣血が）火によつて動かされ、必ず咽燥吐血となる」とある。また百十七條に「太陽病、火でこれを熏ずると、汗が出なくなり、その人は必ず煩躁となり、病邪が太陽経を巡りおわつても治癒しないなら、必ず血便が出る。これを火邪という」とある。太陽病は火熏によつて汗を出すことはできず、たとえ汗が出たとしても、また火力に襲われることになる。陽実証にこの方法を用いると、逆効果で、躁乱、血便などの症状が出ることを説いている。

陰虚の熱証の場合は、激しい火熱法を用いてはいけなかりでなく、比較的穏やかな灸法すら用いてはならない。たとえば『傷寒論』二百八十四條に「少陰病、咳をして下痢、譫言をいうのは、火氣に攻められたからである。必ず小便が難しいのは、少陰汗を強く責めすぎたからである」とあった。少陰が邪を受けると、本来なら温薬によつて陽を助け、しかも邪を駆逐できるが、火が襲いかかり汗を出させると陽が回復しないで陰が損なわれる。したがって変証が生まれる。以上から陰虚の病の場合、たとえ陽を扶助しなければならぬとしても、誤治にならないために、火を用いてはならないのである。また『傷寒論』

張仲景は鍼灸に関する學術思想において後世に深遠な影響を与えた。たとえば、許叔微が張仲景を鍼

張仲景は方薬に長じていたが、病気によっては鍼灸と併用すべきであると考えていた。たとえば『傷寒論』二十四条に「太陽病、初め桂枝湯を服し、反つて煩して解けざる者は、先ず風池、風府に刺し、却に桂枝湯を与れば則ち愈ゆ」とある。鍼、灸、薬それぞれに長所があり、併用すれば単独で用いるより効果があることを説く。また彼は「熱入血室〔子宮に熱邪と血が結合して現れる病証〕」を治療する際、小柴胡湯などの方薬を主とする一方で、期門に刺鍼するなど、鍼灸をも主としていた。異なる病状によってそれぞれの治療法の長所を採用し、治療効果を高めているのである。この思想に対して、彼は『金匱要略』で「婦人の病……脈の陰陽、虛実、緊弦を審らかにし、其の鍼薬を行い、危を治し、安を得」と明確に言及し、鍼、灸、薬を併用することの重要性を強調している。

湯液を調和し薬を調合し、兼ねて鍼灸を施す

治療において、張仲景の弁証論治にはもう一つ重要な方法がある。「已病を早期に截つ」である。つまり病の進行をとめる治療を行う。たとえば『傷寒論』八条に「太陽病、頭痛七日以上至りて自ずから愈ゆるは、其の経を行ること尽くるを以ての故なり。若し再経を作さんと欲すれば、足陽明に鍼し、経をして伝わざらしめば則ち愈ゆ」とある。張仲景は病が臟腑に入らなければ経脈の間を伝わっていくと考えた。その場合、六日で一巡する周期が存在し、七日目には六経すべてを巡り、治癒へと向かう。もし治癒に向かわなければ二巡目に入る可能性がある。二巡目をとめるためには足陽明経に刺鍼を施し、経を巡らないようにして全快が得られるのである。

張仲景は『内経』の予防思想を継承し発展させ、未病を早期に防ぎ、已病を早期に截つという考え方を提起した。彼がいう未病を早期に防ぐとは、罹患する前に摂生保養に注意し、外邪が侵攻するのを防ぎ止め、発病しないようにする、そして罹患した場合は、早く治療しなければならぬが、まずまだ病んでいない臓を治療するということを指す。たとえば「肝の病が現れば、実脾を先に治療すべきである」とある。また『金匱要略』に「若し人能く養慎すれば、邪風をして経絡を干忤せしめず。適に経絡に中り、未だ臟腑に流伝せざれば即ちこれを医治す。四肢才に重滯を覚えれば即ち導引、吐納、鍼灸、膏摩し、九竅をして閉塞せしむることなかれ」とある。

未病を早期に防ぎ、已病を早期に截つ

陽証には火が禁忌であるが、例外もある。たとえば『傷寒論』四十八条に「二陽がどちらも病み……顔全体が赤い場合は、陽氣が表部に鬱積しているので、解表するか、あるいは熏すべきである」とある。陽熱が表にあり、透散できるので、熏法の透散能力を用いて熱を除去する。これは陽実が内部にある場合に清法を用いたり、「陽が盛んで陰虚であれば火灸を用いてはならない」という考え方とは異なる。

百十九条に「微数の脈は、灸をしてはならない。熱と火氣とが合わさり邪となると、逆証となるからである。灸を用いると、虚を傷ない、実（火熱）を助けることになり、血を脈中に散失させてしまう。火氣が微かであっても、内部を攻める力は十分にあり、筋骨を傷ない、血は回復しにくくなる」とある。陰虚の人は筋骨が元々うるおいがなく滋養されていない。そうした時に灸法を用いると、火氣が微かであっても津液は損なわれやすく、さらに陰虚であればやせ衰え、あるいは病を悪化させる。したがって慎重にしなければならぬのである。

灸の師法とし、手本としているのは非常に明らかである。許叔微が記載している「熱入血室は期門に刺す」
「妊娠は勞宮に刺す」「太陽病、經に伝わらんと欲するは、足陽明に鍼す」や、「陰毒漸深」には關元に
灸して手足が暖まると効果が得られ、「陰毒沈困」で脈が微細數、陽氣が出ていこうとしているものには
臍中に灸する、などの治案、治法はすべて張仲景の鍼灸學説をさらに發展させたものである。また張元素
は「井」「原」穴を用いて傷寒を治療する系統について言及している。近代では、承淡安しやうたんあんの著した『傷寒
論新著』が『傷寒論』に関連する条文を鍼灸法に結びつけて論述、展開し、張仲景の鍼灸治療熱病學説を
継承、發展させている。